

特集 「現代世界と古典学」

古典学の再構築 第4回公開シンポジウム報告

開会の辞：科学と古典学

上山 春平

評価委員

転換期における古典の役割

この見出しは、季刊『文学』（岩波書店）の最近号に掲載された座談会記録のタイトルです。

座談会のメンバーは、「古典学の再構築」プロジェクトの代表中谷英明氏、同プロジェクトに参加する中川久定、久保田淳、興膳宏の諸氏、それに国際科学会議会長の吉川弘之氏、以上五名。

この座談会の冒頭で、吉川氏は、きわめて明快で迫力のある問題提起をされています。しかも、それは、冒頭部分だけではなく、終始一貫、くりかえし熱意をこめて語られているのです。

その論旨は、一つの事実認識と、一つの提案とから成っています。

一つの事実認識というのは、たとえば、「自然科学は、過去のテキストをたった一つの方程式にして、簡単に次世代が継承できるような形に集約する。」といった言葉で、簡潔に表現されています。これは、言うまでもなく、十七、八世紀の西欧で始まって、いまではほぼ地球規模に広がった「科学革命」の成果にほかなりません。

つぎに、一つの提案とは何かと申しますと、それは、上記の事実認識と不可分な関係にあり、次のように要約できるかと思えます。

「科学革命」は、知識を圧縮して伝え、使用するテクノロジーを開発した。このテクノロジーは、人間の生活に大きく貢献してきたのだが、最近になって、その知識をどう使うべきかという知識を手に入れることが、緊急の課題となってきた。

このような吉川氏の基本テーゼが、古典学とどうかかわるのかと言えば、「自然科学」には、知識をどう使うべきか、といった倫理的な知識が欠けているので、そのような知識の供給を古典学に要望したい、といった形になっているように思われます。

「自然科学」と古典学

以上に紹介した吉川弘之氏のご意見は、一般に「自然科学」と呼ばれている学問の特徴を、的確にとらえたうえで、その学問にたずさわる側の観点から、今日、古典学に期待されるものについて、きわめて寛容に、しかも端的に語っておられるように思われます。

わたくしが、「寛容」と申ししたのは、これまで、いわゆる「自然科学」の研究者たちは、古くから伝えられてきた宗教、哲学、歴史、文学などの文献の研究にたずさわる古典学という学問を、現代および未来の人間の生活にとって無用の長物として否定的にとらえる傾向が強かった、と思われるからです。

もともと、今日の「自然科学」を生み出した「科学革命」は、古典学における重要な研究対象である古代ギリシャ哲学や中世キリスト教、それらとの戦いを勝ちぬくことによって、はじめて実現することができたのでした。ですから、「自然科学」の側に上記のような古典学評価が生じるのは、きわめて自然な成り行きであったと言えます。

こうした成り行きにさからって、古典学にきわめて積極的な役割を期待するという吉川氏の発言は、新たな成り行きの萌しを、自らの広く深い問題意識を通して、主体的にとらえなおしている点、きわめて新鮮な問題提起として受けとめることができるように思われます。

古典学と地球学

ここからは、吉川発言にたいする、わたくしのひとつのレスポンスでございます。

わたくしは、これまで、自然科学という用語を、カッコに入れて表記してまいりました。それは、この用語が、広く世間に通用しているにもかかわらず、必ずしも適切な用語とは思われないからです。そこで、「通称」という思いをこめて、カッコに入れて用いてきたのです。

吉川氏がおっしゃるように、古典学のテキストとしては一冊の書物になるような理論を、「自然科学」は簡略な数式にまとめて表現することができる、というのは確かな事実であります。これは必ずしも「自然科学」の全領域について当てはまるわけではありませ

ん。たとえば、地質学、岩石学、海洋学、植物学、動物学、自然人類学、気象学などのばあいを考えてみてください。これらの学問のばあい、研究の対象とされるのは、「自然科学」の対象であるはずの広大な宇宙ではありません。宇宙に浮かぶささやかなチリにすぎない地球とその周辺で生成された物体に限られているのです。わたくしは、かねてから、「自然科学」のうちのこのよう学問のグループを、「地球学」と呼ぶことにしています(朝日選書『学問の地図』、中公新書『第三世代の学問』)。

これらの学問は、常識的には「自然科学」のなかまに入れられるのですが、地球の歴史を機軸とする歴史の要素が大きく入ってくる点とか、複雑をきわめる対象を枚挙し分類する作業が不可欠な点など、いわゆる「人文科学」もしくは古典学などと共通する点が少なくありません。

普遍学と人間学

「自然科学」のなかでも、わたくしが「地球学」と呼ぶのがふさわしいと考えている上記のような学問は、成立の歴史が古く、それらにかかわるテキストは、古典学の研究対象にもなっています。

こうした学問のグループと、たとえば、一冊の書物になるほどの知識を、簡単な数式に要約することができるような学問のグループとは、同じく「自然科学」と呼ばれていまして、実は、異質な学問の世界を構成するものとして、はっきりと区別した方がよいのではないかとわたくしは考えています。

では、「自然科学」という共通の名で呼ばれながら、上記のような「地球学」と区別されるべき学問グループ、つまり、「科学革命」の成果として、最も科学らしい科学と考えられてきた学問グループ、それを何と呼べばよいのか。わたくしは、それを、「普遍学」と呼んで参りました(上掲書参照)。

「普遍学」といえば、デカルトやライプニッツが、“mathesis universalis”と呼んだものが、すぐ連想されるかと思うのですが、わたくしは、こうしたやや早産ぎみの理念が、十分に成熟した姿を想定しているのです。

わたくしの念頭にある「普遍学」の姿は、数学を基底としながら、基礎的な物理学と化学と生物学が、整然と層をなしながらゆるやかに統合されている姿であり、この学問グループの対象の範囲は、観測装置の発達にともなって限りなく拡大するので、「地球学」のばあいのような明らかに限られた境界は認められません。

以上のような考察をふまえたうえで、吉川提案をふりかえてみますと、そこで「自然科学」と古典学の関係として表現されている事態は、より正確には、「普遍学」と古典学の関係としてとらえなおすることができるのではないかとおもわれます。

しかし、両者の関係を更到的確にとらえようとすれば、広大な学問の世界における古典学の位置づけをはっきりさせておく必要があります。

そこで、とりあえず、学問の分類法としてこれまでに広く通用してきた常識をふりかえてみますと、そ

れは、理系と文系の二分法を前提として、理系の方を「自然科学」と呼び、文系の方を「人文科学」と「社会科学」に分ける、といった構図になっています。

こうした常識的分類法に対しまして、わたくしは、学問の対象世界の範囲（外延）を基準として、学問の世界を次のように大きく三つに分ける構想を提案してまいりました。

- (1) 普遍学 対象世界は無限大に近い。
- (2) 地球学 対象世界が主として地球とその周辺に限られる。
- (3) 人間学 対象世界が主として人間に限られる。

こうした構図を前提とするとき、古典学は、明らかに「人間学」のグループに位置づけられます。それは、古典学が、各種の人間集団の言語を用いて思想もしくはさまざまな情報を記載したテキストを、主要な研究対象とするからです。

このように考えを進めてまいりますと、吉川提案の基軸になっている二つの学問分野の関係、つまり「自然科学」と古典学との関係が、「普遍学」と「人間学」との関係としてとらえなおすことができるのではないかと考えられます。問題は、こうしたとらえなおしによって、吉川提案に対する何か稔りのあるリスponsを呈示することができるかどうかです。

わたくしの提案

- ① まず、「普遍学」一元論の学問観を見なおす必要があるのではないかと。
- ② 科学がなすべきことについての知識を育てるために、古典学が貢献できる点は少なくないと思うのだが、古典学によって提供される知識を、有効な実践指針の形につくり変えるためには、まず、古典学と深いかわりのある「人間学」グループとの共同作業が必要であり、さらに、「人間学」と「普遍学」とを仲介するにふさわしい位置にある「地球学」グループの協力が不可欠ではあるまいかと。
- ③ 古典学の研究対象としてのテキストは、たんに「人間学」グループの学問の対象にかかわる記録だけではなく、「地球学」や「普遍学」グループの学問の対象

にかかわる記録をも含んでいるので、もし、さまざまに分割された古典学の諸分野のあいだに、有効な連携の道が開かれるならば、古典学は、地球上のさまざまな地域で数千年にわたって展開されてきた学問の大きな鳥瞰図を提供することができるのではあるまいか。

こうした作業を通して、一七、八世紀の西欧に始まる「科学革命」の意味をあらためてとらえなおし、「科学革命」以来数百年の間に学問の世界がどのような変貌をとげ、その変貌によって人間の生活や地球上の生物の生活にどのような変化が生じたのか、といった問題が、古典学者たちのリーダーシップのもとで、「人間学」と「地球学」と「普遍学」の観点を十分に織り込んだ形で追求されるならば、そのことは、たんに古典学の活性化に役立つばかりではなく、たとえば吉川提案のような形で「普遍学」の側から提出されている課題に対して、有効に答えるための手がかりともなりうるのではあるまいか。

(2000年9月21日攔筆)

